

大岡 玲

ヒ・ノ・マ・ル



僕たちは

三島賞、芥川賞の両賞を……………受賞した唯一の新鋭が

空中楼閣に

最前衛の文学意識で描く、……………初めての長編。

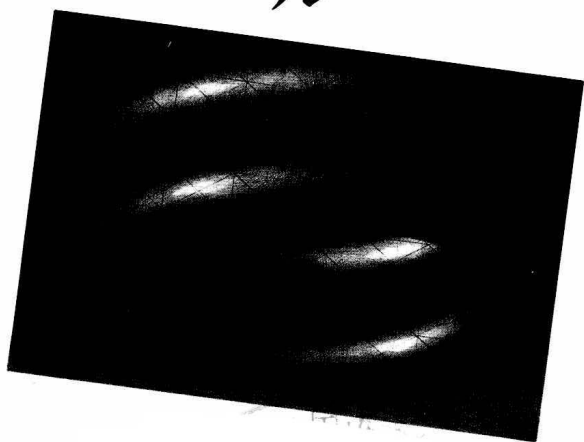
生きている

KIRA ŌOKA

SHINCHOSHAKU

ヒ・ノ・マ・ル

玲



新潮社

〈著者略歴〉

1958年東京生まれ。東京外国語大学ロマンス系言語学科修士課程終了。現代イタリア文学を専攻。89年「黄昏のストーム・シーディング」で第2回三島賞受賞。90年「表層生活」で第102回芥川賞受賞。

ヒ・ノ・マ・ル

発行——一九九二年六月一五日

著者——大岡玲<sup>おおかきま</sup>

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

162 東京都新宿区矢来町七一

電話——  
営業部(03)三二六六一一一  
編集部(03)三二六六一五四一一

振替——東京四一八〇八

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります

© Akira Ōoka 1992. Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さる。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-386301-3 C0093

ヒ・ノ・マ・ル



私が妖怪アカナメにはじめて出会ったのは、うららかなある春の朝のことだった。

その日もまた、いつものように午前六時五十五分に目覚し時計が鳴り出し、私はゆっくり睡眠から覚醒へ旅立った。眼を閉じたまま、しばらくの間まぶたの裏側で外界の明るさを味わう。やわらかな明るさである。きつと空は春らしくかすんでいて、そこからけむったようにゆらめく光線が、あたり一面に降りそそいでいるのだろう。さあ、ベッドからとびだして、カーテンと窓を開け放ち、朝の空気を深呼吸しよう、と私は内心で自分に勢いよく号令をかけた。

と号令をかけたままでは良かったのだが、その瞬間事態が実はさほど簡単ではないことに気づいてしまった。つまり、私はかなり重症の二日酔いになっていたのだ。

二日酔いには、小意地の悪いところがあつて、眠りから醒め意識がもどった途端に正体を現わす、というような芸のないことはしない。まず初めに、脳が支えもなしに宙ぶらりんになったまま、ふらりふらりと揺すられているような感覚がある。この時はまだ、必ずしも気持ち悪い状態ではない。妙に高揚していたりもする。しかるのちに、一拍おいて、ああ、もしかしたら自分は二日酔いなのではなからうか、という不愉快な認識が訪れるのである。

この一拍というのがくせものなのであって、こういう場合、まぶたを上げて外界を眺めるといふ動作の前にはしっかりと心準備が必要である。もし何の心がまえもなく不用意に眼を開けて、部屋の天井がぐるぐる回っているのを目撃してしまったりしたら、もうとりかえしがつかない。終日二日酔いに先手を打たれ続ける。相手が理不尽な性質の持主であることはわかり切っているのだから、それだけこちらに慎重さと冷静さが要求されるのである。

私は気持ち悪さを我慢しつつ、眼を閉じたまま慎重に起床の手順を検討した。

まず深呼吸をしよう。そして、深呼吸をしている間に、内臓各所の不快感を一つ一つ確認し、それらの内臓が私の意志の統制下にあつて、決して二日酔いの圧制のもとにあるのではないことを意識にたたき込む。そうだ、きのうの夜接待してくれた製薬会社の社員がよこした二日酔いの新薬、あれをのもう。服用する際、吐気がないことを確認しなければならぬ。薬をのんですぐに吐いたんでは、元も子もない。ついでに頭痛薬ものもう。もし落ちついてくるようなら、そのあとは濃い目のコーヒード。

手順が決まったことに満足し、私はそれを忠実に実行に移した。二十三回深呼吸をしたところで、私はゆるゆるとまぶたを持ち上げた。視野がひらけてくる。少々曇りぎみだ。目やにでもできているのかもしれない。そう思つて無意識に眼をこすろうとした瞬間、ベッドのかたわらに誰かが立っているのに気づいた。あわてて焦点を合わせてみるが、まるで見知らぬ男だ。少し後退した額の下に、妙にひょうきんな丸い眼があり、その眼が興味深げに私を眺めている。

まったく自慢にならないことだが、私は元来ひどくものに驚きやすい。たとえば、横断歩道で信号待ちをしている間に、私の頭上一メートルのところ張り出した木の枝にカラスがたまたま

とまつたとする。カラスがふいに大声で鳴いた。さあ、私はどういう反応をするだろうか。

正解は、まず顔面蒼白になる、そしてあわてふためいて車道にとび出して、車にはねられる、である。七歳の時、私は実際にこれをやり、三メートルほどとばされた上、右腕を複雑骨折した。全治二カ月。

学校に居残って遊び過ぎた揚句の暗い夜道で、隣家の主人に挨拶がわりに肩を叩かれて失神したのは、十歳の春まだ浅き頃だ。驚いた隣家の主人が急いで家まで運んでくれたのだが、そのあと三日間高熱が下がらなかった。脳のタンパク質がいくぶんかは破壊されたかもしれないほどの、それは、熱だった。

こうした性質の持主としては、当然のことだと思ふのだが、私は驚かされるのは嫌いだし、びつくりした様子を露わにするのも好まない。挨拶や礼儀と間違えているのか、他人の話にむやみやたらと驚いた様子であいづちをうつ人がいたりするが、子供時分から私は、その種の人を一種の社交性精神病だと考えてきた。

したがって、狼狽を我が身から追い払うために私は、冷水摩擦から催眠療法に至る様々な訓練を自己に課してきた。やらなかったのは宗教とオカルト関係の修練だけだろう。この二つは、どうも性にあわない。とにかくその甲斐あつてか、役人になつた今では、周囲の人々から冷静沈着な人間と認められるようになったのである。

だが、地金は地金だ。戸締りを嚴重にしたはずの地上六階にある自室で、招待した覚えなどない——たとえ酔つたからといって、知り合いでもない人間を連れ込むようなタチの男では、私はないのである——人物が、落ち着き払って寝起きの私を観察している、という状況においては、



メッキはあつという間に剝げる。メッキが剝げてどういふことが起こったかというところ、まず冷汗がでた。それから身体の各部分で体温がバラバラになったような感じがし、その次には脱力感が襲つて来、同時に喉の粘膜が干上つて互にくっついてしまった。心臓が早鐘のように——早鐘を実際についたことも聞いたこともないのだから、単なる常套的な修飾語に過ぎないが——打ち出した。

一方、身体の方があまりに常套的な驚きを表現してしまつたせいか、頭の方は少しだけましな態度を見せた。補償行動とでもいふべきか。“いつたいこの得体の知れない奴は、なんだつてこんなところに許しも受けずに突つたつていやがるんだ？”という疑問の塊が、中枢神経を通じて咽喉部に伝達され、干上つたままの粘膜を刺激した。そしてその塊は、はなはだ聞きとりにくいかすれ声の問いかけとして、音声化されたのである。

「あの、すみませんが、あなたはいつたい……」というのがそれだ。

頭の中ではかなりきつい調子だったものが、言葉になつた瞬間には弱体化している。あろうことか闖入者にむかつて、“すみません”などと言つてしまふところなど、言語道断の気の弱さである。おまけに、語尾をぼかして、相手に残りの部分を推論させようとしているところなど、きわめて日本的ななれ合いの感覚と言えるのではないか。

もちろん、相手が強盗とかなかそうといった種類の人物で、凶暴性を帯びる場合があることをとつさに考慮したのだ、という考えもなりたつので、弱腰であることには同情すべき点があるかもしれない。が、問題はまだある。なにかと言うと、問いかけが日本語でなされてしまつたことだ。

立っている男が、いかにも日本人風に見えた点に、この問題の落とし穴がある。もしかりに、男が身長一九〇センチほどで、金髪碧眼であったなら、私はどうしただろうか。きっとまず、西欧語系の言葉——といつてもぼくは英語とカタコトのフランス語しか喋れない——を思い出そうとし、それからうろたえているあまりその言葉が口から出てこないことに絶望し、ただなすすべもなく眼をまじまじと瞠っているだけ、という経過をたどっただろう。驚愕のさなかに他国語が口について出てくるほどの、厳しい修練を積んでないのだから、あたりまえだ。

しかし、金髪碧眼だからといって、西欧語を話すとは限らない。ひよっとすると、日本語の達人が泥棒になっていた、という筋書きもありうる。この論理をさらに発展させれば、反対に、日本人風の姿をしていたからといって相手が日本語を解するとは限らない、という理屈も成り立つ。アジアの国々には、一見日本人と区別のつき難い風貌を持つ人々が多く存在するのであって、男がそれらの人々のうちの一人で、しかも日本語を知らない可能性がある以上、問いは無効かつ無礼——日本人などと思われたくないかもしれないか——だった確率は高い。外交的配慮の欠如は、良心的な官僚のもっとも忌むべき失態だ。もつとも、男が近頃人のうわさに高い幽霊とかいうものであるとしたなら、再び問題は紛糾するが、とりあえずそれは官庁の扱うべき事項ではないので不問に付すことにしよう。

男は私の問いかけには、ほとんど反応をしめさない。相変らず黙って私を見据えている。私の方はいうと、声を出したせいで一気に気持ち悪くなってしまった。上半身だけはやっとの思いで起こしたのだが、視界は白くかすみだし、血液がすごい勢いで身体から洩れているような感覚が襲って来、さらにはどうにも避けがたい胃からのすっぱい激流が喉元に殺到した。

ところが、むふつという音が鼻からとびだした時、どうしたわけか私のとがらせた唇の前に狙いすましたという感じで洗面器がさし出されたのである。彼がうしろ手に持っていたとおぼしい様々な感想が一種の切迫感をともなつて頭のあちらこちらに明滅したが、緊急事態だったのでありがたくそこに吐かせていただいた。

吐き終ると大きなコップ一杯の塩入りぬるま湯がさし出され、うがいが済むと濡れたタオル、そのあとには冷たい水と二日酔いの薬が差し出される、という手際の良さだ。

薬をのんで一息ついていると、洗面所の水音が止んで男がもどつて来た。

「本当にどうもすみません。後始末までしていただいて」と、私はベッドから出た方がいいのかどうか思い悩みつつ、礼を言った。視線を真つすぐ彼の顔にあてることができず、胸のあたりを不本意ながら観察してしまふ。えび茶とクリーム色の細かい格子縞のシャツ——たぶんウール地であろう——の上に、カーキ色のサファリジャケットを身につけ、ケリー・グリーン色のチノパンツをはいている。あまり若者風のスタイルではない。会社勤めには見えないし、どちらかといえ自由業、それも左翼系といった雰囲気がある。

「もう吐気はないかね？ あるようなら、もう一度洗面器を持つてくるが？」

男が口をきいたので、またしても私の心臓はドキついてしまい、もう一度気分が悪くなりかけた。が、必死でこらえて、彼のぶつきらぼうな口調の、しかし親切な内容を表わした質問にかぶりを振ることで応答した。そして、かぶりを振った結果生じた遠心力を利用して、頭を正常な位置にもどし、相手の顔を正面から眺めた。

男の額がかなり後退していることと、眼がいわゆるどんぐり眼まぶたという種類のそれであることは

観察済みだったが、あらたに彼の表情の複雑さに気づいた。彼は眉根のあたりに皺を二本刻み込むことで深刻に考え込んでいるかのような雰囲気を作り出し、こめかみの肉の緊張度で怒りかけているかのような威圧感を醸し出し、さらには口元の微妙なねじれぐあいでも演出していた。どう見ても若い男ではない。顔の皮膚などずいぶん使い込んだ感じがする。といって、中年とか初老と言うのも気が進まない。年齢不詳という形容さえあたらぬ。強いて言うなら、あまりにたくさんの異った年齢を持っているせいで、年齢そのものが便宜的なものになってしまっている、といったような言い方が妥当なようだ。

「どうだね、気分の方は。もしベッドから這い出てこられるようなら、コーヒーを一杯飲もうじゃないか」

男は、私が観察を進めていることなどまるで感じていない調子で、ぞんざいに言い放った。よほど不愉快なタイプでない限り、私は相手に先にぞんざいになられてしまうと、もうほとんど抵抗できない。そして、男はその変った外観にもかかわらず、こちらの気を妙に魅きつけるところがあつた。

「そうですね。気分もどうにかおさまりそうだから」

そういう返事を私があると、彼はさつさと寝室を出ていった。冷汗まみれになった下着を替え、ワイシャツとズボン姿になった頃、ダイニングの方からガーツという騒音が聞こえた。その音のあとを追ってすぐ、コーヒー豆を挽いた時の、あの香ばしい匂いがただよってくる。やかんの中の水が沸く音もする。男は、電動コーヒー挽きの場所も、コーヒー豆の所在もわかっているわけで、人の部屋にずいぶんくわしかつた。

靴下をはこうかどうしようか迷っていると、再び男のかなり低い音調の声がした。

「砂糖はいくつかかな？」

「いえ、結構です。いつもミルクをたっぷり入れるだけですから」

「なるほど、豆はフレンチローストでミルクたっぷり。バリ風というわけだ。しかも、低温殺菌ノンホモジナイズドのビン入り牛乳とくれば、これはなかなか味にうるさいということになる。

俺なんぞ口に入れられれば何でもいいって手合いだから、君とは勝負にならないな」

「はあ……」勝手なことを言っている相手には、返答すればするほど具合が悪い。むこうのペー  
スにはまるだけだ。私は靴下をあきらめ、ダイニングに行くことにした。男は、無理をすれば六  
人でかこめるテーブルに両肘をつけて、コーヒーを啜っていた。彼が手にしているのは、淡い緑  
の花模様があしらわれている、来客用に買った薄手のマグカップで、私の分はというと九  
百八十四で買った変哲もない、白い厚手のマグカップに注いであった。気持ちがいいほど遠慮の  
ない人物である。ブラックコーヒーを片手に新聞の社会面を読んでいるところなど、実に悠然た  
るものだ。昭和の初め頃に活躍したという説教強盗も、こんな男だったのじゃなかるるか、と思  
う。

私の方はというと依然びくびくもので、椅子に坐ってしまおうとつさには身動きできなくなる  
という思惑から、立ったままマグカップを取った。彼の足元には、ぐだぐだに崩れた肩かけカバ  
ンがらうずくまっている。死んだ猫のようなカバン、という形容を読んだことがあるが、これは死  
んだ茶色の猫を生干しにしてから、三十回ばかり四トントラックで轢いた、とでも言うべき様相  
を呈していた。

「やはり私の立場としては、まず一番にお訊きしたかったことなので、もう一度お尋ねしますが、あなたにいったい誰なんです？」と私は、状況を一応ふりだしにもどす質問を試してみた。

男は新聞から視線をはずし、私の顔を正面から見据えた。この正面から見られる、というのも私の苦手科目の一つである。あまりにむきだしで、少々非礼に感じられるのだ。

「まあなんとというか、俺は人間とは違う存在なんだな」いやに気取つてのんびりした口調だ。こはたぶん、<sup>ク</sup>どう人間と違うんですか」とでも訊くべきなのだろう。しかし、私には私のやり方がある。

「すると、あの幽霊とかいう例の……」

私が相変らずふし眼がちに問い返すと、彼はいきなりのんびりした態度をふり捨て、こめかみをピクピクさせ、いらだたしげにかぶりを振った。

「いや、俺はそんなものではない。つまり、その、君が誤解しないように説明するためには、手順がいろいろあると思うんだ。なんと云えばいいのか……」と、彼は急にいらだちに恥かしさを混ぜた表情になった。栗の渋皮のような色で皺の多い頬に、赤味——だと思う。なにしろ地肌の色が色なので、赤には見えない——がさす。

そして、彼の恥かしげな態度を見た途端、私もある単語を頭に思い浮かべ、急速に恥かしさのとりこになってしまった。ドッベルゲンガー、というのがその単語である。別の言い方で表現するならば二重身、ひらたく言えば自分の分身のことだ。

私は、彼が私のドッベルゲンガーではないかと思つてうろたえたのである。だいたいこのドッベルゲンガーというのは、文学史的にはなかなか重要な存在である。ホフマンが定型をつくり、

エドガー・アラン・ポーもドストエフスキも芥川龍之介も、自分の二重身をちゃんと見ている。しかも、この二重身を見た文学者の大多数は、あまり幸福な人生を送ったようには思えない。それどころか、悲惨だとさえ言える場合が多い。まず、その悲惨さを思つて、彼が私の二重身だったら、と思つてゾツとしたのである。

その上、ドッベルゲンガーなどという単語や、それに関連する文学史的知識がすぐに頭に浮かぶことからわかるように、私は実は文学好きというやつなのだ。だが、日本の一般的な企業や官庁に勤めていてしかも文学好き、などというのは、あまり一般的な態度とは言えない。別に悪いことをしているわけではないし、むしろ時には尊敬されたりすることもあるのだが、あまり大声で誇るといふ気分にはさせてくれない趣味なのである。

小説などを読むなら、あくまで暇つぶしのようなふりをしつつ、娯楽物だと烙印を押された作品を読むか、さもなければ仕事に役立つ人生訓に満ちたものを手にしていなければ、なんとなく恰好がつかない。なにしろ私は、入省三年目の頃昼休みに職員食堂で、ゲート——そういうえば、彼も二重身に出会つたことがある文学者だ——の「若きウエルテルの悩み」を読んでいるところを部下の——といってもほぼ同年輩だが——女性に目撃され、大変な変わり者という眼付きをされた苦い経験の持主なのだ。ゲートのようなポピュラーな作家のものでこうなのだ。ディーノ・ブッツァーティだとかアレクサンドル・グリーンなんて作家を読んでいたらどうなつただろう。本式の変態だと思われたか？ いや、ゲートみたいに有名な人のものだからかえつていけなかったのだろうか。それとも、ただ似合つていなかつたというだけのことか。とかくに女性は計り難い。

したがって、もしドッベルゲンガーなどに会うなどという行為をやらかしてしまった日には、二度とまともな役人にはもどれないだろうという、恥かしさの入り混じった恐怖を感じずにはいられなかったのである。が、もう眼前に現われてしまったものは、どうしようもない。確かめずにいたところで、事実に変わりはないのだから、と私は腹をくくって、彼に訊いた。

「もしかして、あなた私のドッベルゲンガー、なんじゃないですか？」

男は私の言葉を聞くと、いっそう落ち着きのない様子を示した。桜でできた明るい赤茶色のテーブルを右のこぶしでせわしなく叩き、怒るべきか吹きだすべきか迷っているような表情をした。「それは違う。第一、君と俺のどこに似かよったところがあると言うんだ？ 分身なら、当然似ているべきじゃないか。君の頭は禿げ上っちゃいないし、腹回りがだぶついてもない。齡だつて君はまだやつと三十に手がとどくというところだし、こっちはどう見たって四十過ぎだ。もっとも俺には年齢なんてものは、ほとんど関係ないがね。仕方がない。はつきり言ってしまうおう。俺は妖怪だよ」

そう言われても、そもそも妖怪と幽霊とドッベルゲンガーの境界線がどこに引かれるのか、見当もつかない。とりあえずの知識を口にしてみる。

「妖怪？ 妖怪っていうと、あの首がのびたり座敷に一人でぼつんと坐っていたり、というあれですか？」

「そう、あの、あれだ」と、彼は自分の顎の下を左手の親指と人差し指でむやみにつねりながら、渋い顔付きで言った。

「で、どういう妖怪なんです？ なにか、その、名前がおありでしょう」



「アカナメ、というのが俺の名だ」

私は、子供時分に読んだ『妖怪大百科』なる本の内容を、記憶の中で復元してみた。すると、おぼろげながら「アカナメ」がどういう妖怪だったかを思い出すことができた。

「たしかアカナメというのは、風呂についた垢なんかをなめる妖怪だったんじゃないですか。昔よくあった、木でできた小判型の風呂にのしかかって、赤い舌を長くだしている絵姿を見たことがありますよ」

「ぬめぬめした緑色の垢を、眼をぎらぎらさせてなめとっている、というやつだろう？ だからいやなんだ、自己紹介するのは。世界というのは、誤解と偏見に満ちたこの種の紋切り型でいっぱいなんだ」と、アカナメは憤懣やるかたない、といった調子で声を荒げた。

「誤解と偏見？ それじゃ、垢なんかなめたりはなさらないわけですね」

そう私が言うと、彼の顔はこれ以上赤くなれば、もう毛穴から血——妖怪の血というのはどういふものなのだろう——を吹くしかない、というほどに赤らんだ。

「いや、もちろんなめる。なめることはなめるが、しかしそういつも、というわけではないし、君が想像するようなやり方でじゃない。悲しむべきは、象徴性を多くの人間が理解しないことだ。垢をなめるといえば、それがそのまま垢をなめる具体的行為に結びつく。我々妖怪はしばしばその種の短絡思考に悩まされるんだよ。まるでこっちが、象徴的行動をとれない下等な生き物であるかのように、ね。差別というもおろかな振舞いだ」と、彼は一気にまくしたて、まくしたて終わると、一息でコーヒーの残りを飲みほし、ヘレンドのカップをたたきつけるように受け皿に置いた。私はカップが割られるのではないかと思ひ、ゾツとした。